

# 仕事が教えてくれたこと

愛知県・愛知県立国府高等学校 3年 三浦 良美

去年の今ごろ、私には夢なんて無かった。高校2年生にもなれば、進路について話し合う機会が多くなる。しかし、私にはそれが不思議でたまらなかった。「何で今なの？ 高校生なんて大学、専門学校、ましてや社会のことなんて全然わからないのに。何で今からそんな話をしなくちゃいけないの？」そんな気持ちが心の中で渦巻いていた。出てくるのはいつも反発の言葉ばかりで、社会なんてまるで別世界のお話だと思っていた。しかし、そんな私に転機が訪れたのは、それから数日後のことだった。

私は2年になってからアルバイトを始めた。国府高校ではバイトは基本的に禁止されているのだが、私は家の事情で許可が下り、家の近くのバラ農園で働くことにした。私にとってアルバイトは初めての経験で、最初は少し、不安を感じていた。しかし、そんな気持ちはすぐに吹き飛んだ。

バラ農園には主にその近辺のおばさん達が働きに来ている。おばさん達はとても仲が良く、困ったことがあると、いつも協力し合って助け合っている。そんな中に何も知らない若者が入っていけるのだろうか、という孤独に似た戸惑いがあった。しかし、そんなことは全く気にしていないという様

子で、おばさん達は優しく、温かく私を迎え入れてくれた。むしろ、おばさん達のほうが気をつかってくれているようにも見えた。顔は知っていても、全く話したことの無い、言わば、初対面に近い人間に対して、これだけ親しく接してくれたことに嬉しさを覚えた。

しかし、その反面、働くことの大変さを実感した。

私が働いているバラ農園は、主に午前中が作業時間なのだが、初めて仕事をする私には、かなり長い時間を感じた。仕事場の中は、花が咲かないように冷房がかかっている、それは私としても嬉しい条件だった。しかし、ずっと立ち仕事というのには、正直まいった。重い水のバケツを運んだり、出荷用の箱を組み立てたりと意外とせっせと動き回るので、足が段々と重くなっていった。まさに、「足が棒になる」という言葉の意味を、自分自身の身体で理解した。

花を縛る作業では、個選をやらせてもらった。個選とは二等品の花のことで、秀品ではないが、素人の私にはほとんど見分けがつかなかった。というよりも、バイト初日にして花を触らせてもらったことが嬉しくて、そんなことは関係なかった。

花を束ね、茎を切る瞬間には緊張した。間違えて切ってしまうと、商品にはならない。責任重大だ。一番サイズの大きい2Lにもなるとかなりの力が要る。

「バチン」

ニッパーに似た真新しい大きなはさみで、切り落とした茎が足元へと落ちて行く。切ってしまった。そんな気持ちと共に、出来上がった下手くそな花束を見て、何となく、私の心は仕事を成し遂げたという達成感に満ちていた。

仕事が終わって家に帰ってくるなり、一気に疲れた気がした。仕事の大変さ、他の人への気遣いなどなど、初心者ながらいろいろなことを考えていたため、肉体的にも、精神的にも疲労感に溢れていた。まだ働き始めて1日目だったが、嫌なことも良いことも、学んだことは予想以上のものだった。そんなことを考えながら、私は眠ってしまった。

このバイトを始めてから、親に対する見方が変わった。特に母親は、ものすごいパワーが必要なんだと思う。

私の家はトマト農家で、夏場は朝早くからハウスや畑に行くことも珍しくない。帰ってきたら、サイズ別に分けたり、袋詰めなどほとんど休む暇も無く、ずっと働いている。そんな中で母は、家事もしなくては行けない。これは相当のエネルギーを要するだろう。しかし、自分のため、家族のために働

いている母の姿は、輝いて見えた。働くことには全て意味があることを教えてくれたような気がした。そんな母を私は尊敬する。

だから私は、出来ることはしようと決めた。農作業もそうだが、私は料理が好きなので、夏休み中、できるだけ夕飯を作るよう心がけた。私の行動で、少しでも母が休まれば、と思っただけのことだ。

何をやってもすぐ飽きる私だが、このアルバイトだけは今も続けている。それは多分、働くことの大変さを知ったと同時に、働くことの大切さを知ったからだろう。おかげで、今までやらなかった手伝いをするようになったし、親のありがたみが分かった。おそらく前までの私のままなら、こんな風には思わなかっただろう。もしかしたら、そのままニートになっていたかもしれない。働くということを実際に体験することで、仕事というもののイメージを変えることが出来た。それに夢を持つことも出来た。今の私の夢は栄養士になることだ。それは先にも述べた通り、料理が好きなこともあるが、母の手伝いをしているうちに栄養についても興味を持ち始めたからだ。それは仕事をしていなければ出会えない夢だったかもしれない。私にとっていろんなものを与えてくれた仕事に感謝しながら、これからもこのアルバイトを続けていこうと思う。